医師として向き合う震災と 新型コロナ

北見医師会 北見赤十字病院

野口 淳史

本誌への投稿は9年ぶり2度目になります。9年前の2011年は東日本大震災の年で、被災地の陸前高田市で行った医療支援活動がテーマでした。陸前高田市の医療の中核を担ってきた岩手県立高田病院は、津波で病院としての機能が完全に停止しましたが、当時現場で指揮を執られていた石木幹人院長を中心に急ピッチで復興への道のりを歩み、同年7月に仮設診療所が完成しました。さらに翌年の1月には設診療所が完成しました。さらに翌年の1月には仮設病棟が完成し、2018年3月に本設病院に移転するまでの間、長きにわたり全国唯一の仮設施設の病院として運営が続けられていました(岩手県立高田病院ホームページより)。被災した方々の、決してあきらめず前を向いて歩み続ける姿が今でも目に焼き付いています。

さて、今回は新型コロナウイルス感染症(COVID-19) で大変な騒ぎになっており、北見市ではクラスター 発生や政府主導によるマスク配布など、全国でも大 きく報道されるほどの非常事態となりました。全国 小中学校の休校やイベント自粛に加え、北海道では 早々に鈴木直道知事により緊急事態宣言が出され、 まさに前代未聞の医療パニックが起きました。当院 はオホーツク地方最大の基幹病院であり、保健所を 介して多くの患者を受け入れております。一方で、 外来は感染拡大防止のため縮小し、病状が安定して いる患者については診察を行わず、処方箋のみ発行 して院外薬局にFAXすることで、来院者数を極力 減らす努力をしておりました。患者への連絡や予約 変更は、当院内科外来メディカルクラークや看護師 が担当していましたが、患者自身からも受診を回避 したいという旨の電話が殺到しており、スタッフは 毎日遅くまで対応に追われていました。ウイルスと いう見えない敵と、終わりの見えない戦いを続ける ことは日々ストレスであり、心身ともに疲れが溜ま りやすい状況にありながら、何とか乗り越えること ができているのは、病院全体の協力体制がしっかり 構築されていたからにほかなりません。当院の感染 対策本部は、特に負荷のかかりやすい内科医や麻酔 科医の当直を一時期免除するなど、医療スタッフの 健康を最優先に考えております。医療崩壊を防ぐた めにオホーツク医療の全体を俯瞰し、地域の指定医 療機関とも連携して情報共有に努め、何でも相談で きる窓口としてリーダーシップを発揮しています。 このような状況だからこそ、現場で指揮を執るリー ダーの冷静な判断力や信頼性がいかに重要かを実感

しております。

さて実際の医療現場は、経験してみないと分から ないことも多々あります。私もCOVID-19肺炎患者 の診療にあたりましたが、CT所見や血液検査所見 から、典型像はある程度見極めが可能です。一方で、 厚生労働省が目安として定めた『37.5℃以上の発熱 を4日以上』来す患者はいくらでもいます。また特 徴として挙げられている『すりガラス影を伴う急性 肺炎』『両側性の肺炎』というのは決して特異的な 所見ではないのですが、『新型コロナを否定できな い』という理由で多くの症例が当院へ紹介され、診 療することとなりました。実際には一般的な細菌性 肺炎であることも多いのですが、指定の医療機関 でなければ、医師が少しでもCOVID-19を疑ったら 診療不可能となる現状も理解できます。しかしなが らそのような患者をすべて受け入れ、疑似症として 扱うことは不可能であるため、当院の内科医師や感 染対策本部の判断でCOVID-19を「否定」すること もありました。入院病床も限られているため、実際 に疑わしい症例については、軽症例は自宅待機、入 院が望ましいものの病床が確保できない場合は他の 指定病院に受け入れをお願いしておりました。当院 には重症患者も数名おりましたので、麻酔科医や ICUスタッフを中心に診療にあたり、一時的にICU をCOVID-19感染患者専用として使用し、ICU管理 の必要な他疾患の患者についてはオホーツクを飛び 越えて旭川の病院に診療をお願いすることもありま した。このような不測の事態に遭遇すると、これ まで以上に病院同士の連携が求められますし、未 知のウイルスとはいえ中国を中心に臨床データが 次々と論文化されていますので、一人一人の医師が COVID-19の臨床像について学び、中途半端な情報 に惑わされず正しい知識を深めていくことが何より 大切だと思いました。今回、当院から多くの患者を 受け入れてくださった病院の先生方にはこの場をお 借りして厚く御礼を申し上げます。

この9年間の私はというと、臨床ではリウマチ膠原病領域を専門として診療を続けながら、大学院進学、さらには米国での研究生活を経て、令和時代の幕開けをオホーツクの中核都市である北見市で迎えることとなり、2年目に入りました。医師としてさまざまな経験をしてきたつもりですが、どんなに経験を積んでもこのような未曾有の出来事がいつどこで発生するか分かりません。それでいて、自分自身は年を重ねていき、社会的責任は増す一方です。常に冷静に状況を見極めて、これまで以上に人と人とのつながりを大切にしながら、今後の医師人生を歩んでいこうと思います。